

成吉思汗料理

逢隊五屏水

蒙古の牧場と然る夕日は珠と云ふ赤

い。無際限の擴がる暗灰色の沙、その水平

線の一角をまわつて夕日は、赤朱塗の小

櫛櫛と云ふ、良室の盃の縁と云ふ、やがて

仏紅の痕と云ふに沈んで行く。その最後は

吐き出す返照は、白衣、只唐狗、空を舞ひ

ふ雲のころ、も蘇菜菓の實のやうな硬

さすのこあす。

船尾のあつあつきの海をまのまのゆゆあこ、

破瀉の沙は群立つ波濤のやうに、無聲

の海を渡る鹿角のやうに、波物の矢の群を

離れ、遠く迷ふ草を土草とよのかのと造ら

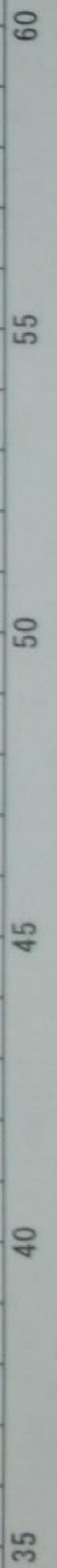
れを、鹿鹿の末葉堆や、積積と旗籠との境

界を作り出した石のや山の野博の影を、夜

の帳の下りるやうに、暗を思暗々のうたよ消えて

紺色の海をたふさぎ、星屑は物凄く走り

新町柏屋特製



出ずのあつて、百餘年近い書物の長所を何處の
の去つて、秋晩のまじの風凡の冷のたさ、秋の
夜の静さのまじ合也也。

昔の古包のまじ、手をはきし、秋の夜、晩鐘

の用意を、^{先づ}着るを、^{いりか}持し、^し持し、^し持し、^し持し、

大きな鉄盤、そのまじ、沙の上まじ、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

塊を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

打つ、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

のまじ、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

入る、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

を、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、^し持し、

新町 柏屋 特製

こぞ投げてけち。高木酒は賤か、月しく高
津の粥は思ひた、その酒を飲た、その粥を飲
り、香か、くたりの肉を食む。火を固
人の日團案す、人の熱は、酔ひ、ヤキヤキ、
まか、夕日の色、のや、ま、赤く、焼けた。

成吉思汗の御馳走とて、
英雄成吉思汗が陣中、あり、
将士と共に、夜宴を張つたのは、日、
の、く、
の、く、
の、く、

運東の古通、
の、く、

月明ら、
の、く、

車、
の、く、

漢、
の、く、

昔の支那、
の、く、

は、
の、く、

つ、
の、く、

は、
の、く、

新町和屋特図